
デビル・サマナー 《異邦人伝》

日高明人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デビル・サマナー 《異邦人伝》

【Nコード】

N5268X

【作者名】

日高明人

【あらすじ】

そこは京都が首都である日本。歴史ある街並はなく、高層ビルが立ちならび、地上に地下に張り巡らされた電車網、最大の人口密度を誇る都市であり、天皇が住まう御所がある。異界なる京都、そこに住む二人の異邦人。イタリア人の男とロシア人の女は、世界をまたがる数奇な物語へと引きずり込まれることとなる。隣に、悪魔を引き連れて。

第一話 悪魔召喚プログラム（前書き）

いほうじん
異邦人

・外国に定住または長期滞在する外国人。幕末から明治にかけて日本に滞在した西洋人は、異人と呼ばれた。

・異教徒を指す。

ユダヤ教の『聖書』（キリスト教の『旧約聖書』）においては、ユダヤ人以外の者を指し、

キリスト教の『新約聖書』においても、特に ユダヤ人以外を指すと思われる。

（初期のキリスト教徒はユダヤ人が多く、ユダヤ教の一派であるとみなす方が適当である為、

また異邦 人の信徒なる表現も新約には存在するため）

《W i k i p e d i aより引用》

第一話 悪魔召喚プログラム

アナウンサーが明日の天気予報を少しばかり嬉しそうな声で伝える。

男性はその声を聞きながら、わずかに落ち着かない様子でリビングの椅子に座っていた。

時計の長針が気になっているのか、何度も何度も天井近くの時計へと視線が飛ぶ。

天気予報がおわり、テレビの放送内容が一日の出来事へと変わったとき、呼び鈴が鳴る。

音に身体を震わした男性は、慌てた様子で立ち上がり玄関へと駆け寄る。

靴下のまま玄関へとおり、男性は鍵を開いて外へとドアノブを動かす。

玄関の外に立つのはひとりの女性、寒さのなか急いだのか頬は朱色混じり。

自宅に女性を迎え入れ、男性はプレゼントがあると言って、女性へ小さな箱を渡す。

驚きと喜びが入り交じった表情となった女性は、箱を受け取り、掌の上で丁寧に箱を開き、

なかに納められていた指輪の輝きを眼にする。

髪をかく仕草をしながら男性は言葉をつむぐ。

女性は頷きながら箱を両手で握りしめ、頬からしずくを落とす。

しばらくの時間が経過して、部屋に置かれた大型の液晶テレビから、カウントダウンの掛け声が響く。

カウントダウンが終わる直前、男性の横に寝そべる女性はささやく。

「新年あけましておめでとう」その言葉がささやき終わったとき、液晶テレビからの音が途絶えた。

見ればテレビは真っ暗であり、

不審に思った男性はリモコンを手にとり操作するものの、テレビは反応を返さない。

男性は何度もしリモコンを手に、ボタンを押す。しかし、テレビは真っ暗。

壊れてしまったのだろうかと思い、男性はズボンを履いただけの姿でテレビに近づく。

女性も白いシートで身体を包みながら、訝しげな視線をテレビに向ける。

男性が近づいた瞬間、暗闇を映すテレビから、異形の腕が現れる。

腕を見て男性は驚きあどずさり、女性は甲高い叫び声を上げた。

腕の次には血まみれの牙を持った口が現れ、

腰を抜かしてテレビの近くで尻餅をついた男性に向かって腕が延びる。

口が続いて血走った眼をした、赤黒い体毛の頭部が暗闇から出て来た。

異形は逃げようとする男性の足首を掴む。

足首を掴まれた男性は悲痛な叫びとともに身体を動かすが、

足首を掴む力からは逃れられず全身をテレビへと引っ張られ、

ついには獣の腕とともにテレビの暗闇へと身体をひきこまれていった。

沼に沈むようにして男性がテレビの暗闇へと引き込まれるのを見ている女性は、

全身を震わせ歯をがちがちと鳴らし、現実を否定する言葉を呻き続ける。

にぶく、物の落ちた音が、部屋に、響く。

女性の眼に映ったのは、肘から先だけの右腕。

肘から先は、噛みちぎられたのか、

筋肉や血管がぶらぶらと飛び出ており、白く尖った骨が見えていた。

眼を大きく見開いた女性は、再びテレビの暗闇から顔を出した、

赤い赤い血を垂らす異形のつりあがった口を見て、最後の声をあげた。

● ● ●

時間は遡り、十二月二十八日。

仕事の納品を終え、息抜きにWebで出回り始めたフリーゲーム、「シン・メガミテンセイ」をダウンロードしてプレイするひとりの男。

モニターに映る画像は、悪魔と話し、闘い、使役するロールプレイングゲーム。

システムの新しさだけでなく、勧善懲悪ではない物語は秩序の守護者にも、

混沌の導き手にもプレイヤーはなることができ、なによりも全ての調停者として、

傍観者にも救世主にも破壊者にもなれる。

自由な立場が選べるだけでなく、選んだ立場で変化する物語も評を

博し、

なぜここまでのゲームがフリーであるのかを疑問視するプレイヤーもいるほどであった。

彼は「シン・メガミテンセイ」の攻略掲示板を眺めつつ、ゲームを進めていく。

「よく出来たゲームだ」

彼のつぶやきが部屋に響く。

一度マウスを握る手はなし、そばに置かれていた白いマグカップへ手を伸ばす。

白いマグカップからは暖かさを示す湯気が立ち上り、彼の鼻腔へほろ苦さを感じる香ばしさを漂わす。

そして、香ばしい匂いどおりの味が舌に広がる。

適度な疲れと相まって、普段吞んでいる珈琲がより一層彼には美味しく感じられた。

「けれど舞台が現代日本のわりには、首都が東京ってところが驚きだな」

マグカップに付けていた口をはなして、彼は独り言をつぶやく。

「現代の日本を舞台にするなら、そのまま首都も京都のままにしておけばいいのに」

なぜだろうな、と心のなかでつないで思う。

彼が見つめる液晶から音がひとつ響く。

黙ったまま彼の目線が液晶の左上へ移動する。目線の先にはM a i

1が届いたことを知らず鳥のアイコン。

アイコンには届いたMailの数を知らず数字が共にあった。Mail受信数「3」。

数字を確認したところで、玄関から来客を知らせるチャイムが鳴る。二回。

「ん……サクラ、かな」

鍵を開く音が聞こえたのちに、鍵を閉じた音、そして靴を脱いでスリッパへと履き替える音。

そのままスリッパの足音は男のいる部屋へと近づいていく。

リビングへとつながるドアが開かれる、そこには白に近い金色の長髪、

一目でわかる異人の証として、青いの瞳を持つ女性の姿があった。

「おかえり、サクラ」

「ただいまジェリオ、ってまたそのゲームしてるの？」

ジェリオと呼ばれた男は、やや赤みがかかった焦げ茶色のくせ毛を手でかきながら、

仕事は終わってるんだからいいだろ、とぼやく。

そのまま彼の黒い瞳は時計へと向く。

「ああ、サクラが帰ってくるわけだ。もう九時過ぎてたか」

「あ、その言い方だとまだ晩ご飯食べてないんだ。もー」

「仕事納めもあって忙しかったんだよ」

「それは私も同じ！ でも丁度よかった、私もお腹空いてるし作るね」

「ああ、頼むよ。洗い物はやっつく」

わざと怒った顔をしてみせた女性は、脱いだコートを壁に掛け、鞆を置いたのち、

両腕の袖をまくりながら台所へと歩いていく。

冷蔵庫からいくつかの野菜を取り出し、テーブルへと置いた女性は、ふんふんと思案した顔をしたのち、声を出した。

「ねーえ、面倒だから一品もので構わない？」

「あー、十分十分」

「はい。じゃあちよつと待ってて」

その言葉のあと、リビングの台所からは小気味良く包丁の立てる音、蛇口から流す水の音、戸棚を何度か開く音が聞こえ出す。

もついちどマグカップの珈琲に口をつけた男は、視線をモニターへと戻す。

ブラウザ、ゲーム画面、Twitter のウィンドウが並んでいるなか、

男の視線はTwitterへと留まり、『仕事がおわったー』と打ったツイートへのリプライ。

『@Giulio | C やあ、いま時間あるならチャットでもどうだい』

「いいタイミングだな、Steven」

マウスを手にとり、ポインタを動かして男はSkypeを起動する。その間にゲームをセーブ終了、Skypeのチャットウィンドウがモニターに展開。

いくつものログイン表示となっているアカウントに並んで、

【Giulio】と書かれた表示名がログインを知らせる緑色へと変わる。

その瞬間、チャットウィンドウが開き文字が表れた。

■ 『やあ、すぐに来てくれて嬉しいよ、Giulio』

□ 『なに、シン・メガミテンセイの作者様がじきじきにおよびなんだ、すぐ来るさ』

■ 『ハハッ、やめてくれないか。くすぐったくて仕方ない』

□ 『それでどうしたんだ？ また新しいアイデアでも沸いたのか？』

よどみのないタイピングで男は文字を打ち込んでいく。

開いたドアの向こうからは、野菜と肉の焼ける音とともに匂いがただよってくる。

■ 『Yes、と言いたところだが、少し違うんだよ』

■ 『実は君に折り入ってお願いひとつあるんだ。いいかな』

■ 『お願いというには違うな、そうだなむしろプレゼントと言ってもいい』

文章が次々と表示されていく。

□ 『プレゼント？ それはまた嬉しい話だが、請求書と銘打たれたものじゃないよな』

■ 『ひどいな。君はいつたい僕をなんだと思ってるんだい？』

□ 『ふむ……シン・メガミテンセイの作者、Twitterのフォロー、』

Skypeのチャット仲間、正体不明の小粋なアメリカ人、どれがいい？』

■ 『個人的な嗜好で言えば最後が一番好ましいね。だけどWeb上とはいえ、』

知り合って数年にもなる相手に対してちよっとひどいじゃないか』

□ 『そう言いながら画面の向こうで笑ってる顔が見えるぞ』
■ 『これは大変だ、どうやら僕はこれから盗撮カメラの有無を調べなきゃいけないな』

モニターに示されるやりとりに男は思わず笑みがこぼれる。

聞こえていた調理の音が止まり、食器がテーブルに置かれる音が聞こえてきた。

□ 『すまないがSteven、そろそろこっちは雛鳥がわめく時間だ』

■ 『おっと親鳥は美味しそうな餌を用意してくれそうかい？』

□ 『噛まずに飲む込むようなことしたら、俺が食われちまうさ』

■ 『それはぶっそんな親鳥だね。しっかりご機嫌とっておかないと』

□ 『こっちは今日で仕事も終わり。明日からゆっくり羽をのばすつもりだ』

■ 『それは羨ましいな！ といっても僕は仕事より趣味が忙しくてしょうがない』

□ 『その趣味で仕事より稼いでる人間がよく言う』

■ 『趣味、趣味、そう趣味だ。ただ命をかけてしまうほどだけだね』

□ 『いい加減、シリアルだけの生活はやめて、ちゃんとしたものを食べたらどうだ』

■ 『僕は知ってるぞ、Giulio。君がだれよりもぐさなことを』

「これは上手いこと返されたな」

苦笑を浮かべてつぶやいたところで、声が飛んでくる。

「ジェリオーできたよー」

「ああ、わかった」

腰を浮かしながら男は指を動かす。

□ 『悪いが、親鳥が呼んでる。またあとでな、Steven』

■ 『待った！ 待ってくれ、さっきのプレゼントのことだけ伝えておきたい』

浮かしていた腰を、一瞬ためらったあとおろす。

□ 『珍しいなそこまでして引き止めるなんて、さてはー』

■ 『おっとそれ以上は言わせないぞ。それよりも、だ。Giulio。』

明日、君のもとにひとつ荷物が届く』

表示された文字を見て男は眉をひそめる。

□ 『Steven……まさかお前にストーカーの趣味があるとは思わなかった』

■ 『最後まで聞かないでからかうのは君の悪癖だな、Giulio。一度お互いに住所を交換して雑誌を送り合ったのを忘れたのかい』

□ 『もちろん、覚えているさ。お前に幼女へのなみなみならぬ情熱を語られたことを』

■ 『待て、待て待て！ いいか？ 僕は七五三というイベントが詳しく分かる資料を求めたはず。』

僕の名誉にかけて言おう。僕はスレンダーな婦女子が好みだとい！

□ 『有り難い言葉をどうも。それで荷物ってのは？』

背中から無言の足音が聞こえてきたが、男は無視。

■『そう、それだ。君に…… テスターをやってもらおうと思って』

「テスター？」

口に出して言うと、顔の横に長い白髪が迫った。

「なーにーをーしーてるーのー」

「ああ、Stevenとチャットしてたんだが、荷物をこっちに送ったらしい」

白髪を垂らす顔は視線をチャットのログへと向ける。

「ふーん、テスターってことはなにかの電化製品とか？」

「どうだろうな」

二つの顔が疑問の色となるなか、モニターは文字を表示していく。

■『テストしてもらうのは…… そうだな、悪魔召喚プログラムと名付けよう。』

そのプログラムが入った機械のテストをお願いしたいんだ』

その文章を見て、男は呆れた感じで口を開く。

□『悪魔召喚…… プログラム？ おいおいエイプリルフルにはまだ早いぞ？』

■『予想通りの反応をありがとう、Giulio。まあなんだ、うまくいったらラッキー。』

駄目なら駄目でそれでいいんだ。むしろ上手く動かないほうがいいんだ』

□『？ 言っている意味がわからないな。動かないとテストにならないだろう』

■『こっちの事情という奴があつてね。なに、面倒ならそのまま返品してくれてかまわない』

□『分かった、引き受けよう。せっかくのプレゼントなのだからな』

■『サンクス、Giulio。それじゃあ、感想をよろしく頼むよ、Bye』

そう言つてStevenのログインを示す表示は、ログオフの無色となった。

椅子に座っていた男は、小さく一息ついて隣の顔を見る。

「悪魔召喚プログラムが届くらしい」

「ぷっ！」

隣の女性は大きく吹き出す。

そのまま笑い声で、

「それって、ジェリオがいつもやってるゲームに出てくるのじゃない」

「そうだ、元々頭のネジが外れてると思ったが、とうとうStevenの奴、頭がイカれたようだ」

「本人はきつと大真面目なんだから、そう言っちゃ駄目よ」

「どうだろうな、送られて来るのはデビル・フィッシュかもしれないぜ？」

「それじゃあ機械っていうのは、真つ赤なデビル・フィッシュを生み出す鍋？」

そう言つて二人は笑い、男はSkypeのログイン表示を赤い退席マークとする。

そのまま立ち上がった男と女は、香ばしい匂いが漂ってくる方へと歩き出した。

ドアが閉じられる。

隣の部屋から料理の味について言い合う言葉が聞こえてくるなか、入力がないため光量が弱くなっていたモニターが、強く光る。

【Steven が ログイン しました】

ライブ通信を要請するコール音が数度鳴り、自動応答によって通信がとられる。

モニターに取り付けられていたWebカメラが起動。

チャットのウィンドウ横に、黒い背景だけを映した画像が表示された。

黒い背景に潜むなにかは、モニター前に人がいないことを確認。

チャットウィンドウに文字が打たれていく。

■『Giulio。君を騙す形となってしまったことを許してほしい。』

きっと機械は動作するだろう、問題なく、だ。

そのあと、君の身に起こることがなにかは今の僕からは伝えられない。

できれば生き抜いてほしい、そして会えることを願っているよ』

【メッセージを 消去 しました】

【Steven が ログオフ しました】

モニターは再び薄い光を放つだけとなった。

第二話 デジタル・デビル召喚

十二月二十九日

ひとりの男が走っている。

時刻は赤い夕焼けよりも夜の闇が空の大半を占めるころ。息づかい荒く男は人通りの少ない裏路地を走っていく。

「な、なんだよアレ！？ わけ、わけわかんねえ！」

焦りと混乱が混ざった声。

背中には力無く男性に寄りかかる女の姿。

「美樹！ 美樹って！ しっかりしろ、しっかりしろよ！」

走る男性の背中血に染まっていた。

だが、その血は背負う女が流していたものだった。

首もとに噛まれた傷、そこから止まることなく血が流れる。

ただただ、逃げることを考える男の背中、徐々に体温が失われていくのが分かる。

「なん、だよっ！ ……なんでゾンビみたいなのが、リアルにいらんだよ！」

いつもの道とはちがう、近道となる路地に入っていたときだった。歩いて数分すると、ゴミ箱を漁る人間が男女の目に入った。最初はホームレスかと思い、関わりたくないようにしたが、女が声をかけてしまった。

「くそつくそ！　なんで声なんかかけたんだよ！」

分かっている、女は困っている人間を見るとほおっておけないのだと。

美德になりこそすれ、それが災いすることなど今までなかった。今までは。

声をかけた瞬間、振り向いた顔は人間のものではなかった。肌の肉は削げ落ちて骨が露出し、肌の表面には蛆が何力所も這いずり回っていた。

そして眼は白く濁り、黒い瞳がなかった。よく見れば蠅が、その人間の周囲を何匹も飛んでいた。

一瞬、その姿にひるんだ女だったが、おびえながら声をかけた。「もしかして病気なんですか？」と。

痛む足裏と息切れしてきたのをきつく感じながら男は思う。あ のとき、女の腕をひいてでも止めるべきだったと。

異形の人間は、女の掛け声に反応した、口角をつり上げた笑みで。そのあとは噛まれた女を異形の人間から離すのに必死だった。離れたあとは異形の人間に蹴りを入れて逃げ出した。

「ちくしょう、ちくしょう……！」

後悔だけが胸につのる。

不意に背中中で動く気配があった。

「み、美樹！　平気か、大丈夫か？」

男は首だけを回して、女の顔を見ようとする。
瞬間、首もとに噛み付かれた。

「み、き……？」

噛まれた衝撃で、男は地面へと転がる。
転んだ拍子に女は背中から投げ出され、二三歩距離ができあがる。

「あ、ああ？　ああああああ！？」

何が始めてるのか、理解できない、いや理解したくない声が響く。
倒れた女が身体をゆっくりと起こす、いつのまにか身体から流れていた血は止まっていた。

男は首もとの傷をおさえながら、足で地面をかきながら座ったまま
あとずさる。

「や、やめ、美樹っ美樹いいいいいい……」

女が、顔を向けた。

白く濁った眼、異様につり上がった口端。

男は混乱と恐怖で、口を閉じたり開いたりすることしかできない。

女はにぶい動作で立ち上がり、呻くような声を出して、一歩男へ近づく。

さらに一歩踏み込んでも、男は左右に首をふり、涙をまき散らして
嗚咽を上げるのみ。

あと一歩の距離となり、女の伸ばす右手が、男へふれようとしたとき。

炎が、女から生まれた。

轟音とともに女の身体が炎に包まれ、炭へと変じていく。
髪と肉が焼ける臭いが男の鼻へ届く。

突然すぎる出来事の連続に男の意識は限界を迎え気をうしなった。

燃えあがった炎はしばらくすると鎮火し、その背後にいたものをあらわにした。

男とは反対側にいたのは、灰色地のダウンジャケットを着込み、肩に三本足の鴉をのせた男性。

「ヤタガラス、そいつを治してやってくれ」

『御意。ディアラマ』

ヤタガラスと呼ばれた鴉がひと鳴きすると、倒れた男の傷口が淡い光に包まれ治っていく。

男性は倒れた男に近寄ると、懐から白紙の札をとりだし、男の血を指につけて文字を書く。

なにかを唱え、札を空中にほおると札は光のもやを放って消える。

「あんたはここで彼女と喧嘩し、彼女に……そうだな、そばにあった工具で首を叩かれた。

そのショックで気絶した。そういうことだ」

男性は一度両手の平を合わせて叩く。

すると札から生まれたもやが男へと降りていき、身体へと吸い込まれていった。

その様子を見て、一息ついた男性はジャケットのポケットから携帯電話を取り出す。

「……病院ですか？ 匿名の者なんですが、怪我して気絶してる人

がいたんで、

救急車呼んでもらえます？ 場所は……」

数分して男性は電話を切り、その場から足早に遠ざかっていく。肩にのっていた鴉は羽ばたいて空中へと消えていく。はあ、と吐き出した息を白く染めながら男性は言う。

「久しぶりの帰京だったのに、どうして京都で悪魔が発生してんだ……」

口調には疲れと嫌悪感だけが含まれていた。

● ● ●

十二月三十日

電話のコール音が聞こえる。

数度してから相手側がとったのだろう、女性の声が話します。

「あ、お母さん？ サクラです。……うんうん、今年はジュリオと新年迎えてから帰るね」

楽しそうに話す声に男はうつすらと瞼を上げる。

寝転ぶ顔の上からはブラインド越しの細い光が当たり、まぶしさに眼が細くなった。

男はそのまま光を遮っていた右手をベッド横へと伸ばし、携帯電話を取る。

携帯を開き、時間を確認。

「……もう昼近い」

大きく口を開きあくび。

頭をかきながら起き上がり、肌寒さに身体を震わせたあと、いつのまにか世間話へと話題をうつした女性の背後を通って洗面台へと向かった。

歯を磨きヒゲを剃り終え、冬用の服装に着替えたのち、女性がいまだ話しているリビングで食事。

白いマグカップから香る珈琲を飲みながら、ベーコンエッグがのつたトーストをほおばる。

ひさしぶりにゆっくりした時間だ、男は内心に想いながら珈琲をもういちど飲む。

「うん、分かってる。それじゃあ、また帰るときには連絡するね。じゃあねお母さん」

女性はそう言ってリビングに設置されていた電話機へと受話器をおろした。

ふう、と一息ついて女性は男が座る正面の椅子へと腰を下ろす。

「おはよ、ジュリオ」

「おはようサクラ、いまのはお袋さんか？」

「そつ、前にも連絡はしたんだけど、もういちど連絡しとこうかなって」

「ふーん、けどお袋さんはロシア語で、サクラは日本語。

どうしてそれでちゃんと会話ができてるか俺は不思議だ」

「お互いに聞き取りだけはちゃんと出来てるから、他所からみたら不思議よね」

「いやサクラはロシア語も話せるだろ」

いいじゃない、と女性は微笑んでテーブルに置かれた、黒いマグカップにインスタントコーヒーの粉を入れ、ポットのお湯をそそぐ。

砂糖を二杯、スプーンで混ぜたあと一口。

「うん、おいしい」

「俺には真似できないな」

「あたしは甘党なんですーべーだ。」

それより、新年はここで過ごすとしていつからウチに行く？」

尋ねられ、男は「うーん」と言葉をこぼす。

「サクラの家行くまえに、航伯父さんに会っておきたいんだが」

「そうになると、行くのは四日ぐらいになりそうかな」

「たぶん、そうなる。航伯父さんが家にいてくれたらだが」

男は苦笑。

女性も苦笑を受けて小さく笑い、小さく声を出す。

「ねえ、今年もイタリアには……」

「……」

「……うん、分かった」

男の無言を見て、女性は言葉を切って珈琲に口付ける。

同じく珈琲を舌の上へと流しながら男は思う。

（もう、いまさらイタリアへ帰ったところで居場所なんかないからな）

砂糖のないブラックは舌に苦々しさを強く残す。

その苦さを快いと感じながら男は一気に珈琲を飲み干す。
京都へ出て来てもう十年、一度もイタリアの実家とは連絡を取らず、
そして実家からも連絡は一切なかった。

（伯父さんのことだ、たぶん連絡はしてるはずなのに）

飲んだくれなイタリア人の父親、浪費ばかりの日本人の母親。
旅行をしていた母親の一目惚れで生まれた男は、
ハーフであることに悩み家庭を省みない家族に嫌気がさして日本へ
来た。

そして母親の弟である伯父を頼ったのだが――

「また、昔のこと考えてるでしょ」

柔らかい声色で作られた言葉が、思考を遮る。

「ん、ああ」

「そんなに考えるくらいなら、いつそ帰ったらいいのに」

「……いまさらどんな顔して帰るんだよ」

「どんな顔して帰っても親は親でしょ？　そしてジェリオはジェリオじゃない」

笑顔を向けられる。

ばつが悪くなったのか男は視線を背ける。

「あ、こら。ちゃんとこっち見なさい！」

「あーあーなにもきーこーえーまーせーん」

「だったら聞こえるようにしてやるっ！」

立ち上がった女性は男の横へと回り込み、

男の耳を両手で広げようと手を伸ばし、男は必死に女性の手を掴んで抵抗。

互いに押しも押されぬやりとりをしている最中、呼び鈴が鳴る。

音に互いの身体が止まり、男は「呼んでる、呼んでる」と口を動かす、

女性は「ちえ」と口を動かして玄関へと歩く。

はあ、とため息をついて珈琲を再度飲むとして、女性の声が飛んできた。

「ジュリオー宅配便、あなた宛にふたつ来てるー」

「わかったーってことは署名しないと駄目か」

「そっだからペン持って来てー」

「あいよー」

答えたあと、男は自室の部屋へもどり、ペンをひとつ手に取る。

そのまま玄関へ行き、荷物を受け取っている女性の横へ行く。

玄関外にいる配達員が男の姿を認めて言う。

「ジュリオ・カッチーニさんですか？」

「ああ、そうです」

「相田航さんから、ええつと……ステイブンさんから荷物を預かってきました。」

受け取った証としてこちらに捺印かサインお願いします」

受け取った用紙にペンで名前を書き込む。

「それと、サクラ・ワルーエフさん宛にも」

「え、あたしにもですか？」

「はい、イワン・ワルーエフさんからですね」

「もうお父さんったら、もうすぐ帰るのに。ジェリオ、終わったらペン貸して」

「はいよ」

「受け取り確認いたしました。それではありがとうございました」

そう言っただけで配達人は玄関を閉めて立ち去った。

玄関には大小三つの段ボール。

● ● ●

「こっちはワインが三本に、日本酒が五本。そっちは何が入ってる？」

「……おせち」

「は？」

リビングで段ボールの封を開いていた男は、もうひとつの箱を開いていた女性のもとへ駆け寄る。

「……うわ、おせちだ。これ、もしかしてお袋さんの手作りか？」

「……多分、そうだと思う。」

今年は新年過ぎてから帰るって言ってあったから、先に作って送ってきたんだと思う」

「いまだき、自宅でおせち作る家庭もないだろ……」

「あたしの両親、日本大好きだから……」

思わぬ内容に脱力したのか女性は、箱につっぱして白い長髪を床に広げる。

はは、と笑って男は言う。

「さすが日本好きすぎて日本に住んでるだけのことあるな」

「もー…… おかげで娘のあたしがどれだけ苦労してるのかと」
「……俺と出会ったのも苦労か？」

男はなんとなく問いかけた。

すると女性はゆっくり身体を起こし、俯いたまま男へ向き、右手をかざした。

「ていつ」

力無い音とともに男の頭部へ右手の指をそろえて当てられた。
何度も何度も力がいらない形で頭部が小突かれる。

「すまんすまん」

男は苦笑しながら女性の手をとって下げ、女性の頭をぼんぽんと叩く。

女性は下げられた手を男性の背に回して、抱きつく。

「……航伯父さんからはワインと日本酒だけ？」

抱きついた姿勢のまま女性が問う。

「そうだな、海外で買ったらしい英文で表記されたワインと、俺にはとてもじゃないが手が出そうにない上等な日本酒だ。

……借りた学費の返済と礼を兼ねて金を送ってるのに、これじゃあ意味がないな」

「いいじゃない、伯父さんの好意でしょ。ありがたく受け取ったらいいじゃない」

「そんなもんかねー」

「それよりも」

と女性が顔を上げる。

「問題はあれじゃない？」

そう視線を向けた先には、大きな包み。

送り主はStevenとだけあった品物。

「Stevenが送って来た、悪魔召喚プログラム入りの機械、か」

「思ってたより大きいね」

「だな。もつとちっさいものだと思ってた」

二人は立ち上がり、幅が縦に1m、横に50cmほどある包みを見下ろす。

男が包みを開くとなかには金属のケースが手前に二つ、奥に二つで合計四つ入っていた。

眉をひそめ、男はケースのひとつを手取る。

「ひとつじゃないのか？」

「ねっそのケース、8桁のナンバーロックかかってる」

「ほんとだ……サクラ、そのなかにバスが書かれた紙とかないか？」

「うーん……駄目、見つからない」

「盗難対策のためか？ Stevenに聞かないと駄目か」

「あれ、ジェリオが持つてるケース以外は鍵も見当たらないよ？」

「んん？ あいつどういいうつもりなんだ？」

立ち上がった男は自室へと向かい、PCのスリープを解除する。

女性も持っていたケースを下ろし後ろをついていく。

マウスを操り、チャットソフトを起動。

Stevenがログインしているのを確認して、男はチャットを開

始した。

- 『昼過ぎだが、おはようSteven。早速だが質問がある』
- 『やあ、Giulio。その様子だと届いたみたいだね』
- 『エスパーな友人を持って嬉しいよSteven。でだ、あのケースの群れはなんだ』
- 『言っただじゃないか、プレゼントって』
- 『日本じゃあ送るプレゼントは1人につきひとつと決まってるんだ。お前は四人いたのか？』
- 『まさか！ もしも四人いたら、仕事は全部三人に任せて、僕は四六時中趣味に打ち込んでいるさ』
- 『さすが趣味に命かけてるだけあるな』
- 『はは、言われると恥ずかしいね』

隣で女性が吹き出す。

- 『で、盗難防止かと思うがケースの解除ナンバーはなんだ？』
- 『Giulio、せっかくのプレゼントだ。開けるのも楽しんでもらいたいと思ってね。』

先の4桁は西暦、後の4桁は月日を入力すれば開くよ』

- 『つまりはクイズというわけか、問題はなんだアナウンサー』
- 『意欲的な回答者で嬉しいよ。日本の石川県、七尾市が制定した「香りの記念日」。それが答えだ』
- 『？ 変なことを知っているんだな、Steven』
- 『僕は君と知り合う以前から日本のフリークなんだよ。ちなみに検索してもかまわないよ』
- 『遠慮なくそうさせてもらう。そうだ、鍵穴の見当たらない残りのケースはなんだ？』
- 『そのケースは時間指定で開くようにしてある。新年をお楽しみに、Giulio』

□ 『また凝った仕掛けをしたもんだな、Steven。おかげで
返しをどうするか楽しくなってきた』

■ 『ああ、そうだ。ケースを開いたあと機械を操作するのはGiu
lio、必ず君がやってくれ』

□ 『わざわざご指名か、嬉しくない予感がするな』

■ 『なに、機械の操作上本人確認が必要なだけだね。おっとそろそ
ろ僕は用事があるから出るよ。』

新年までは連絡が取れなくなるだろうけど、泣かないでくれよ
?』

□ 『わかった、Steven。今日限りでおまえのことは忘れるよ、
ああ良い奴だった』

■ 『相変わらず酷い返しがあつたもんだ。それじゃあ良い年を、B
ye』

□ 『そつちも良い年を、Bye』

Stevenがログオフとなってチャットが終了。

男はそのままマウスでブラウザを起動し、先ほどの記念日を検索。

「サクラ、香りの記念日って知ってるか？」

「ううん、聞いたことないけど、そんな記念日あったんだ」

「あつたみたいだな、日本生まれ、日本育ちのロシア人が知らない
記念日が」

「Stevenって本当謎よね、一体どうしてそんな日本のことに
博識なんだろう」

「さあ、なっと。さて検索結果は…… 1992年10月30日、サ
クラ数字を入れてみてくれ」

「分かった、1、9、9、2。1、0、3、0つと」

ベッドヘケースを置いた女性は、鍵の数字を動かす。

最後の数字を動かし終わった瞬間、留め金が外れる小さな音が響い

た。

女性は横へと移動し、男はケース前へと片膝を着いて座る。

「さて、一体なにが入っているのか……」

金属のケースが、ゆつくりと、開けられた。

● ● ●

「これは……スマートフォンっぽいけど、こっちはベルト？」

開かれた金属ケースのなかには、横15cm、縦6cmほどの携帯電話らしきものと、

その携帯電話らしきものを収める台、に短いベルトがふたつ付いていた。

説明書のようなものは見当たらず、携帯電話らしきものを取る。

「片側は一面液晶だけ、横にスイッチがひとつ、もう一つはカメラか？」

あとはUSBがつながる部分、裏側は金属っぽいけど……ん？」

裏側を見て男が気づく、そこには”Created by Steven”と刻印された文字。

「わざわざ名前まで彫るなんて凝り過ぎだろう」

「これ、一体いくらしたんだろうね」

横の女性が物珍しそうに携帯らしきものを見る。

「さあ、な。けどやたら稼いでるっぽかったから、何百万もかかっ

てたりしてな」

「ひいひいひい、そんなの怖くて触れない」

「変なところで恐がりだなサクラは」

小さく笑って男は携帯らしきものの横についていたスイッチを長押しする。

「スマートフォンと同じようならこれで起動するはずだが……」

数秒押したところで液晶に光がともる。

青白い光が、液晶にひとつの形を作っていく。

その形は二重の円に囲まれた六芒星。

隙間になにかの文様を表示しながら、六芒星が消える。

液晶の左上に文字が表れた。

【悪魔召喚プログラムVer.1.00を 起動しています・・・】

一瞬の表示、後。

【悪魔召喚プログラムを 起動しました】

【ユーザー登録を 行います】

【ユーザー名：Giulio・Caccini で間違いないければ
右の空白に 親指以外の指を押し付けてください】

その表示後、文字列の右側に四角いマスが表れた。

少し迷ったあと、男は指をマスへと押し付ける。

【指紋読み取り中・・・指紋読み取り中・・・指紋読み取り中・・・
登録完了】

【指紋登録が完了しました 続いて声紋登録を行います】

「声紋登録？ そんなことするのか」

「まるで犯罪者の登録みたい」

「変なこと言うな」

【「あ、い、う、え、お」を 高い声 低い声 普段の声 で発声してください】

「三回も言うのか……サクラ、ちょっと耳閉じてろ」

「えーちゃんと言ってるか聞いててあげる」

「……」

言っても無駄と思ったのか、わずかな無言ののち、男は声を出す。

途中エラーが出たため、都合5回声を出すこととなった。

女性は隣で笑いを押し殺していた。

【声紋データ登録中・・・声紋データ登録中・・・声紋データ登録中・・・登録完了】

【最終登録を行います】

「まだあるのかよ……」

「がんばれがんばれ」

【生体マグネタイト波長パターンを 確認します】

【右の空白に 手の平を押し付けてください】

「生体マグネタイト波長、パターン？ なんだこりゃ」

「波長っていうから、鼓動とか？」

互いに疑問をうかべたまま、男は戸惑いながら右手の平を液晶に押

し付ける。

【波長パターン確認中．．．波長パターン確認中．．．波長パターン確認中．．．確認および登録完了】

【なお本体のバッテリー維持のため 微量の生体マグネタイトを徴収します】

「えっ？」

なにかを言おうとして男は突然の目眩に襲われる。

「ジエ、ジェリオ!? なに、どうしたの？」

「……わからん。大丈夫、もう治ったみたいだ」

「ほんとに? ほんとに平気？」

「ああ、ちよつと寝過ぎたのかもしれないな」

軽い冗談を口にしながら男は気怠さを感じていた。

機械の表示が終わった瞬間、身体から力が抜けた感覚があった。

いまのは、と口にはせずに疑問だけを胸に秘めた。

心配そうな顔をしている女性に笑い顔を送って、男は視線を戻す。

【全ての登録 および マグネタイトの補充が 完了いたしました】

【ようこそ Giulio・Caccini 悪魔召喚の世界へ
ようこそ】

二度繰り返される「ようこそ」の表示に男は制作者のユーモアを感じた。

テキスト表示が消え、液晶にはアイコンがいくつか浮き出る。

それぞれ【悪魔召喚】【悪魔確認】【悪魔合体】などのアイコン名も付いていた。

「すごいな、本当にシン・メガミテンセイのプログラムとそっくりじゃないか」

「ねね、ちよつと触っていい？」

つと男が答える前に女性は【悪魔召喚】のアイコンを触れるが、機械は反応しない。何度押しても反応しない。

「指紋登録したから、俺以外は触れないんだろ」

「ええー」

「がっかりするなって、で試しに悪魔召喚でもしてみるか」

「本当に悪魔が出てくるのかな」

「どうかな、実際はそれっぽい表示がでるだけじゃないか？」

【悪魔召喚】のアイコンをタッチ。

液晶画面が切り替わり、無記名のリストがずらつと並んだ。

無記名ばかりのリストの一番上、男の視線が止まる。

【妖精 ジャックフロスト】

「こいつは知ってる奴だな」

雪の妖精ジャックフロスト、シン・メガミテンセイにも出てくる悪魔。

雪だるまのような顔に悪魔のような帽子と首かざりをしていて、特徴的な語尾をもった話し方はゲーム仲間にもファンが多い。

妖精の名前部分をタッチ、すると【召喚しますか】の問いかけ。YESを選択した瞬間、液晶画面に再び六芒星が表れた。しかしその光は強い。

周囲が暗くなるほどの強い光に、男と女性は顔面を腕で覆う。

数瞬の後。

青白い光はおさまり、画面にはひとつのテキスト。

【悪魔召喚が 成功いたしました 以後召喚シークエンスを 簡略
いたします】

「おいおい……ただの演出にしては派手すぎだろう」

「び、びっくりしたー」

『ほんとほんと、オイラもびっくりしたホー』

「えっ」と同時に声を出して振り返る二人。

目の前には薄いもやがかかった姿の【妖精 ジャックフロスト】が、
男の知っている姿のまま、空中に、浮かんでいた。

その口を笑みにとがらせて。

第三話 混沌への幕開け

振り向き、驚いた顔で見る男と女性、二人の視線の先にいたのは、青白い靄のかかった【妖精 ジャックフロスト】の姿そのものだった。

妖精は笑みのまま浮かんでいたと思いきや、自分の姿を見下ろし、はたと気づく。

『ヒ、ヒホー！？ なん、なんだこれ！ ちゃんと具現化してないホー！？』

じたばたと空中で手足を動かすが、妖精は自らの手で青白い身体を触ろうとして触れない。

呆氣にとられていた男と女性だったが、しばらくして表情がもどる。目の前で慌てた様子でいる妖精をしばし難しい眼をして見つめ、男が口を開いた。

「おい……ジャックフロスト、だよな。お前」

『お？ なんだホー！？ もしかしておまえがサマナーか！ ちゃんと召喚しろホー！』

「ちゃんと召喚……？ なにいつてるんだ、俺はちゃんと召喚したぞ」

やや怒気の混じった高い声に押されながらも男は先ほどの様子を思い出して告げる。

「機械には召喚は成功したとある」

『な、な、なんだってホー！？ じゃあ、どうしてこうなってるか、わからないってホー！？』

「ああくそ、ちょっと待て、いま調べる」

そう言つて手元の機械を操作する。

召喚できる悪魔のリスト画面を見れば、画面上部には【ヘルプ】と書かれた文字。

タッチすると項目がいくつか表示されていく。

男の眼が上から下へと動く横、妖精が男の周囲を回り出す。

「……」

『ま、まだホー？ もうすこしホー？ どうなってるホー？』

「ホーホーうるせえ！」

『ヒイ！ そ、そんな起こらないで欲しいホー！』

思わず睨み込んだ男の後ろで笑う声。

妖精と男、ともに笑い声へ眼が向けば、女性が手元を隠して震えている。

『……オイラ、なにかしたホ？』

「サクラ……おいサクラ」

「ご、ごめんジェリオ。その、うん、ぷふっ」

笑いを隠しきれていない姿と声に場が落ち着きを得る。

男は苦い顔で髪をかきながら、妖精に面を向ける。

「ちょっと落ち着け、ちゃんと調べてやるから、な？」

『わかったホー』

妖精もどうしたのものと頬をかきながら頷いてみせる。

再び男は機械の画面へと眼を向け、ヘルプ項目をスクロールしていく。

数秒してから眼がとまり、今度は視線が左から右へと流れる。
注視している項目は【マグネタイトについて】。

「……ええと、悪魔召喚する際、周囲空間の含有マグネタイトが召喚対象の求める、

必要マグネタイト量に足りていない場合、緊急措置として劣化状態で召喚されます」

『れ、劣化状態だってホー！？』

ひどくショックを受けた様子となって妖精は空中にうなだれる。

その様子にどう声をかけたものか、悩む男。

聞こえるのは好奇心を隠さない女性の声。

「ねえねえ、君悪魔なの？」

『ホ？ そうだホーこんなナリだけどオイラれっきとした悪魔だホー！』

「うわーすごい！ こんな可愛い悪魔がいるんだー」

『か、かわいってオイラこうみえても男の子なんだけど……』

「いいじゃない、可愛いのはお得よ！」

『おとく、なのかホー？』

うんうん、と女性が笑顔で頷いている横、

呆れた表情となっている男は一度咳をして口を開く。

「あーおい、立体映像とかじゃなく、お前本当に悪魔なんだな」
『召喚しておいて言うことかホー』

「いままで悪魔なんてもん、見たことがなかったんでな」

『ふーん？ なんかサマナーのくせに変な奴ホー』

「さっきからサマナーサマナー言ってるが、なんだそれは？」

『そんなことも知らないのかホー？』

両腕を組んで得意げな顔となる妖精。

『悪魔を召喚する機械、COMPをあやつり悪魔を使役する者、それがサマナーだホ』

「……デビルバスター、じゃないのか？」
『なんだホそれ』

男は内心に思う。

（シン・メガミテンセイと違う？）

そして先ほど聞きたいいくつかの単語を思う。

「COMP、というのかこの機械は」
『？ おまえそんなことも知らないホ？ ドシロートっていう奴ホ
ー？』

馬鹿にするような口調に、男のこめかみに血管が浮く。

「もういい、お前は機械にひっこんでろ」
『あああああ、まてまてまてまつんだホー！！！！』

機械の【悪魔送還】を押そうとして妖精が慌てて止めに入る。

『こ、こう見えてもオイラ役立つホ！ 魔法も使えるし、色々お得ホ』

「え、君魔法も使えるの！？ 見せてみせて！」
「おいサクラ……」

止めようとしたが、女性は「いいじゃない」と言っ て聞かない。

『じゃあお披露目するホー！ よく見てるホー！』

妖精の声とともに辺りが静かとなる。

集中するかのよう に瞼を閉じた妖精は、両手を振り上げ勢いよくおろしながら言う。

『そおーれ、ブフ！』

青白い姿の妖精は両腕を前へと突き出した姿勢。

静かな、沈黙だけが部屋のなかを過ぎ去る。

窓にかかるブラインドは微動だにせず、証明も変わらず光を放ち、暖房もきいている。

周囲には、なにも変化が起きていない。

口端をひくひくさせながら妖精は、

『ブ、ブフ！ もいっちょブフ！ そんでもってブフ！ あ、それブフ！』

幾度と無く叫びながら指をさしたり、拳をつきだしたりするが、なにも起こらない。

男は無言で機械を操作しようとする。

『まままままってホー！ これはきつとアレだホー！』

さっきのほら、マグネタイトが足りないってやつ のせいだってホー！』

半目になった男の視線が妖精に突き刺さる。

横から女性がなだめるように言葉を出す。

「あんまりいじめちゃだめよジェリオ」

『きれいなオネーサンのいうとおりだホー！』

「ちっ……」

『いま舌打ちしたホツ！？』

ええい、とつぶやき、男は視線をぶつけなおす。

「お前が本物の悪魔なのか、Stevenが仕込んだ立体映像かはわからんが」

赤みがかかった焦げ茶色のくせ毛をかきながら、男は立ち上がり、言葉を続けた。

「俺の名はジェリオ・カッチー二と言うんだ、お前とかサマナー呼ばわりはするな」

座っていた女性も金髪に近い白い髪をなおしながら立ち上がり、男の言葉に続く。

「あたしはサクラ・ワルーフ。ねえねえ悪魔くん、君のお名前は？」

空中を浮遊する青白い姿の妖精は喜んで答えた。

『オイラは霜の妖精、ジャックフロストだホー！』

● ● ●

キーボードを軽くたたいて、マウスを動かす男の姿がある。

目線はディスプレイへとむかつており、画面には「ジャックフロスト 妖精」が検索されたページ。

いくつかのサイトが表示されたページのうち、適当なのをクリックして飛ぶ。

男の眼が左から右へとうごき、脳へと文章を送っていく。

「イングランドの、民間伝承として伝えられる存在、か」

背後をちらりと見れば、そこではベッドに腰掛けた白髪の女性と青白い妖精が談笑している。

名乗り合ってからいくつかの会話を経ていくうちにわかったことがあった。

ひとつ、妖精はとある人物にたのまれて機械のプログラム内に封じられていた。

ふたつ、とある人物とは自らをステイブンと名乗っていた。

みつ、無事に召喚されたときは召喚主を助けるようたのまれていた。

珈琲の苦い味が口内にひろがっていく。

思考を止めないまま、男はキーボード横においた、COMPと呼ばれる機械を見る。

見た目や内蔵するプログラムの類いはまさに、

「シン・メガミテンセイそのものだが……」

喚び出された悪魔はこちらの知らない単語で呼んでいた。

サマナーにCOMP、どちらもゲーム内では一切見なかった呼称だ。気になってWebで検索してみるものの、男の望むような情報はまるで出てこなかった。

「悪魔たちの常識、つか常識があるか知らんがその世界での呼び方なのか？」

腑に落ちない、雪だるまのような姿をした妖精が嘘や騙るそぶりはすくなくともなかった。

妖精は当たり前のように機械をCOMP、召喚者である男をサマナーと呼んでいた。

「ぜんぜんわからん」

あきらめて椅子をまわしてベッドへと向く。
白髪の女性と妖精は楽しそうに話している。

「俺が悩んでいるのに楽しそうな奴らだな」

「んー？ だったらジェリオもこっちで話したらいいじゃない」

『そうだホーなにむずかしそうな顔してるホー？』

「お前のようなわけわからんのを目の前にしてるからだ」

半目となって睨む。

『ヒイヒイ、サクラちゃんサマナーがいじめるホー！』

「大丈夫大丈夫だよーこわいこわーい人はほっておこうねー」

「たくっ……つかお前、名前呼ぶつもりじゃないな」

『サマナーこそオイラのことおまえ呼ばわりじゃないかホー』

「いちいちジャックフロスト、なんて呼ぶのはめんどうだ」

「それだったら名前つけてあげたら？」

思い立ったように女性が言う。

「名前？」

「そ、だってこの子のジャックフロストって言うなれば通称でしょ？」

だったら、

「もつと親しみこめて呼べるようなネームをつけてあげようよ、ね」
『ヒーホー！ さっすがサクラちゃんオイラうれしくてとろけそう
だホー！』

「……ホーホーうるせえからグーフォG u f oでいいだろ」

その言葉に女性と妖精が静かになる。

「な、なんだ。なにだまつてるんだ？」

「……ジェリオってときどきセンスがいいのか悪いのか分からなくなる」

『もつとひどい名前を想像してたけど、意外だったホー』

「お前らな……」

呆れた顔となる男を尻目に女性は妖精に向く。

「よおっし！ ちょっと悔しいけど君の名前はグーフォでいいかな？」

『わるくないホーそれどころか今ちよつとサクラちゃんに呼ばれて
嬉しいホー』

「あーもう調子のいい奴らだな」

再び談笑へと転じ、今度は苦笑顔で男も混じり出す背後。
キーボード横に置かれていたCOMPの液晶が静かに輝く。
その液晶画面には、

【妖精 ジャックフロスト：固有名 G u f o を登録】

とあった。

● ● ●

十二月三十一日 午前三時過ぎ。

灰色地のダウンジャケットを着込んだ男が大きな通りを歩いている。男が歩きすぎた通り名を示す看板には『堀川通り』とある。

口元からは薄く煙りがあがる煙草をくわえながら男は、目つきはするどく、歩く身体の動きはわずかな緊張で張っている。

道を照らすのは街灯だけ。

ときおり、どこから騒ぎ立てる声がひびいてくる以外、ちかくには人氣がまったくない。

たまにタクシーが排氣音をたてて通り過ぎていく。

『一条通り』と書かれた看板の下を歩き過ぎたところで男の足は止まる。

「おかしい……どうして結界がねえんだ」

視線が睨む先は一条通りよりも北、石造りの鳥居がたてられた神社。そこは安倍晴明を奉る神社。

京都においてもっとも大きな敷地を有する神社のひとつ。

男は足を動かし神社へと近づいていく途中、煙草を口から捨て足裏で火を消す。

近づくにつれて鳥居がせまってくる。

「……」

男はただ無言。

白い息を吐いて、鳥居の前へと立つ。

「何年振りになるんやら……」

小さく、消えるぐらい小さくつぶやき男は鳥居をくぐって境内へと足を踏み入れた。

違和感。

「!?!? これは!?!」

ジャケットに突っ込んでいた両手を出して男は身構える。

鳥居の外からは一切匂わなかった血の香り。

だが、鼻に香るのは別に肌を刺すものがある。

殺意の残滓。

「……なにがおきてんだ。くそっ」

舌打ちとともに男はダウンジャケットの前を開き、内側より二本の管を取り出し言う。

「出てこいヤタガラス、オンコット」

言葉とともに二本の管から青白い光が発し、男の前方へと大きな光

がふたつ現れる。

ひとつは空中へ翼をはためかせる三本足の鴉。

もうひとつは朱の体躯に白き髪、金色の冠をいただき、大振りの剣を持つ猿。

「ヤタガラスは周囲の警戒、オンコットはついてこい」

鴉は鳴いて応え、猿は頷いて男についていく。

歩きながら男はジャケットの懷から文様が書き込まれた札をいくつかとりだし、

参道の周辺を左右に見ながら進む。

寶銭箱のある本殿前へとまで歩いたところで、

男が石畳の参道から外れ本殿横へと歩んでいこうとしたとき、上空をとんでいた鴉が鳴く。

鳴き声に眉をひそめ、男は駆けだす。

その背を鴉と猿が追う。

境内は不気味なまでにしずまりかえっており、男の足音だけが響く。

砂利をかくようにして走る先、見えてくるのは本殿裏にある視線隠しの樹々の奥。

清明神社をあずかる神主の家族が住まう邸宅、そこに明かりはない。邸宅へ近づくとつれ男は肌を焼く殺意の濃さに総毛立つ。

「くそがつ」

吐き出す息は白く、冷たい空気だというのに冷や汗が男の背を流れる。

見えてくる二階建ての邸宅、その玄関口前で倒れ伏している姿がひ

とつ。

女が白い装束を着て倒れていた、真っ赤な血を流して。

白い息を吐きながら男は倒れた女の近くへ駆け寄る。

座り込み、うつ伏せとなっている女の身体に手をかけ、

「おいっ！　生きてるか！？」

身体を起こそうとして首から上だけが地面に伏したままとなった。
絶句する男の目前、力ない身体は堅くなっており、首からの血は固
くなっていた。

追いついた猿は男が触れている身体を見て言う。

『首を断ち切られておるな。見事なものだ』

「……おい、ヤタガラス」

『なにか、我が主』

「近くに悪魔の気配、それと生きてる人間の気配はあるか」

鴉は飛ぶのやめ、立ち上がった男の肩にとまる。

『近くに悪魔の気配無し。人の気配も無し』

「くそつたれが」

悪態をつき、男は猿をつれて邸宅内へと入る。

そこには血一色となった舞台が整えられていた。

天井、壁、床、なにもかもが血に染まっていたまま。

強い、歯ぎしり音を男が鳴らす。

靴をはいたまま、邸内へはいり歩いていくと血に混じっていくつも

の肉片、骨片。

ときには内蔵がぶちまけられ、異臭と腐臭がいきまじる。数分歩いたところで、男は邸宅の一番奥にある部屋へとつづく場所に立つ。

部屋と通路を隔てるふすま、そのふすまが切り裂かれていた。

何も言わず男はふすまをよけ、室内へと踏み込む。

血を吸った畳が湿った音をたてる。

円を組むように敷かれた座布団の上には、首のない身体が座布団と同じ数だけあった。

いくつかは後ろへ倒れており、なかには驚いたように手をのばす姿もあった。

「一族が集まったところを狙いやがったか……」

つぶやきとともに男は視線を、円に敷かれた座布団の上座に向ける。首より上がないため判別しづらいが年老いた男と思わしき身体。無表情でいた男は、薄く口を開き乾いた声でつぶやいた。

「親父……いつたいなにがあつたんだ」

血に染まり、だれひとりとして動く者のいない部屋のなか、ダウンジャケットを着た男の疑問だけがこだました。

• • •

十二月三十一日 午後十一時過ぎ

リビングのソファでうとうとしていた男は、ずり落ちかけて眼が覚める。

「う、ん？ ああ、寝てたのか俺……」

目をこすり、伸びをしつつ焦げ茶色の髪をかきながら男は壁の時計を見る。

「ふああああ、ってもう年明け前か」

そのままキッチンが一緒になったリビングを見渡す。

キッチン前にあるテーブルでは両腕をまくらに寝息をたてている白髪の女性。

女性の上付近でふよふよ浮いている青白い姿の妖精。

「悪魔でも寝るのか」

まぶたを閉じて空中で横になっている妖精を見て、笑いが出る。

立ち上がり、男は寝室兼仕事部屋から毛布を持ち出し、寝ている女性の肩へ掛ける。

掛けてからキッチンへと向かい、流し台近くに置かれた電気ポットに水を入れスイッチオン。

もう一度身体をのばし、腰を左右にふれば小気味良い音が鳴った。

「新年明けたら一度風呂に入るか」

流し台に腰を預け、テーブルへと向き直る。

寝息をたてている女性に視線をあわし、笑みが浮かぶ。

「相変わらず気持ち良さそうな寝顔をしてるな、サクラは」

言ってるあいだにお湯が沸き、ポットへ身体を向けて男はマグカップに珈琲の粉を入れお湯を注ぐ。

鼻にただよってくる珈琲の匂いに意識がはつきりしてくるのを感じ、マグカップを持って女性が座っている対面の椅子へと座った。

立ち上がる湯気と香り、そして口内に流れる珈琲の味と温かさを男はゆっくりと味わう。

静かで、それでいて満ち足りている、そんな気持ちを男は覚える。頭上を流れていく妖精を眺めながら思うのは、

（最後に変なこともあったが、今年もいい年だったな）

壁に掛けられた時計の時を刻む音が部屋にひびいていく。

なにをするでもなく男は椅子の背もたれに背を預け、ぼんやりとした顔で空中を見つめる。

（このまま仕事を続けて、サクラと同棲しつづけて、いつかは結婚して……）

想いを先へと馳せる。

生まれた場所ではない異国の地に住み、そして得た相手。

幼い頃にはまるで想像しなかった現在に、男は思う。

（恵まれすぎて、なんて言ったら怒るだろうなサクラは）

思い、もういちどマグカップにくちづけようとして、手が止まった。

「ん？」

視線が空中をただよっている妖精にとまる。

青白い靄がかかった姿に異変が起き始めていた。

身体の部分部分に電流が走るかのような光が発しだす。

バチッバチッと鈍い音がたち、音が連続していく。

「おいおい、なんだどうしたんだ」

口づけようとしたマグカップを置き、男は焦った表情で立ち上がる。そうしている最中にも妖精の身体は光に包まれていき、時計の秒針と長針と短針、その全てが十二をさした瞬間。

室内を光が、覆った。

● ● ●

一月一日 午前零時零分零秒

両腕で光を遮るようにしていた男は、閉じていたまぶたをゆっくり開き、

光を放った源である妖精をゆっくりと見る。

腕をおろした先、眼にうつったのは先ほどまでとは違い、青白い靄のない、

はつきりとした姿となった妖精の姿。

「なんだ……？ グーフォの姿が、しっかり見える？」

合っているのかどうかもわからないため疑問系でつぶやきが出る。いままでは青白い靄のかかったような薄い姿であったのが、照明の光を反射し、眼に見えて質感がわかる姿となっていた。自身の異変に気づいたのか妖精は瞼をひらく。

『んん？　なんだホー？　なんか身体の調子が……』

目の前に手を伸ばしながら言っていた言葉が途中で途切れる。
手を見ている格好で動かなくなった妖精を見て、男は手を伸ばしながら言う。

「おい、グーフオ。お前の姿、はつきりしてるんだが」

男の言葉に妖精はぶるぶる震えたあと、

『ホー！　ちゃんと具現化したホー！　やったホー！』

歓喜の声で叫びをあげた。

「……んう、なーにどうしたのー？」

叫びにつられて女性が眼を覚ます。

『サクラちゃん！　見て見てーオイラのこのプリティボディをー！』

「え？　あ！　ちゃんと触れる！　なんでなんで！？」

『きつとマグネタイトがこの辺りいっぱいになったからだホー！』

「よくわからないけど、よかったねー」

『よかったホー！　これできつとオイラの魔法もちゃんと使えると思うホ』

「おおーついにグーフオの魔法が見れるんだーってジェリオ……どうしたの？」

手をつなぎあって喜んでいる女性と妖精の横、男はつぶやく。

「マグネタイトが、この辺りいっぱいになった？」

男はその言葉の意味を考える。

今のいままで霧がかっていた妖精の姿突如確かなものになった。

それはCOMPのヘルプにあった召喚対象の必要マグネタイト量が足りたため。

（なら、そのマグネタイトはどこから？）

答えのひとつはCOMPを起動したときの記憶にあった。

（あの機械は起動時に微量の生体マグネタイトを俺から取った、ということとは）

悪魔の身体を構成するマグネタイトは人間から得られる。

シン・メガミテンセイでも同じ仕組みであったのを思い出し、さらに男はゲームでのことを記憶から掘り起こす。

（確か、ゲームでは魔界への通路が開かれたことで悪魔が世界に溢れたとあった）

つまり魔界には悪魔を構成するマグネタイトが豊富にあるということ。

そこまで考えて男は頭を振る。

（馬鹿か俺は、魔界なんてのはゲームの設定だろ、現実には有る訳が無い）

心配するように男を見る女性と妖精に、大丈夫だと返して椅子に座

ろうとして、

警報音にも似た高音が突如室内を切り裂いた。

「なんだ！？ どつからだこれ！」

「ジェリオ！ これ、このケースからだよ！？」

「Stevenが送った余りのケース？」

いまだ玄関近くに置かれていた三つの金属ケース、音の発信源はそこからだった。

慌てて男と女性がケースに近づいていくと、やがて警報音は止み、何か鍵の外れる音が響いた。

段ボール箱に入れてあったままのケースを取り出し、床へと置き開く。

「……これは」

男が開いたケースの中身、そこにあったのは銃、そして数種類の弾薬。

「ジェ、ジェリオ、こつちも銃が入ってる、けど……」

隣で女性が開いたケースにはマシンガンと弾薬。

互いに驚きと不安を隠せないまま、最後に残ったケースを男が開いた。

なかには何色もの大きささまざまな光沢のない石が入っていた。

『これ知ってるホー魔法石ってやつだホー』

「魔法石……まさか、ゲームにあったやつか？」

思い出すのはゲームにあった魔法の代用となるアイテムの存在。

魔法の名が与えられたストーンは使用時に叫ぶことで発動させることができるのだと。

口元を歪めながら、男は苦々しく言葉を漏らす。

「Steven、ジョークにしてはやりすぎだぞ」

いったいどういふつもりでこんなものを送ったのか、そう問いただそうとして男は仕事部屋へ向かいPCの電源を入れる。ディスプレイに光がうつりチャットを起動、だが。

「!？　どうなっているんだ？　Webにつながっていない？」

画面にうつるのはアカウントがログインできていない無色マーク。自分だけでなく知り合いのアカウント全てがログオフ状態。

まさかと思い、Twitterを見ようとするがやはり見れない。

「サクラ！」

「な、なに!？」

「電話だ！　電話をどこでもいいから、電話をかけてくれ！」

「わ、わかった」

ケースそばにいた女性は、戸惑いながら立ち上がりリビングの固定電話へ向かい受話器を取る。

そのまま外線ボタンを押すが、反応がない。

えっとなった女性はそれでもボタンを押す、しかし一向に切り替わらない。

「ジェリオ！　電話つながらない！」

「こっちも駄目だ！　携帯もつながりやしない！」

携帯電話をもったまま男はリビングへ戻り、今度はリモコンを手に
とってTVへ向けた。

が、電源は入っても何も映らないまま。

「TVが映らない……Webもつながらなくて、電話も通じない……」

「ね、ねえジェリオ、なに、なにが起きてるの」

「わからないが、明らかに異常だ」

怯えたように震える女性を見ながらも男は考える。

新年を迎えた瞬間、全てがおかしくなった。

『サクラちゃん大丈夫だホーオイラがついてるホー!』

「……うん、ありがとうグーフォ」

女性を励ますように元気な声を出す妖精。

二人のやりとりを見ながら男の脳内には最悪の想像が浮かぶ。

冗談だ、有る訳が無い、そう内心にいくつも否定をしながら男は妖精に尋ねる。

「な、なあグーフォ、もしかしてお前の同類が近くにいたりしない、
よな」

男は願った、いないと答えてくれるのを。

『? サマナーどうしてわかるんだホ?』

「!!!!!!!!!!」

最悪だ、その思いだけが胸を占めた瞬間、

【警告 警告 半径5m内に 敵性悪魔の反応を 感知しました】

隣の部屋からビープ音とともに電子音声が聞こえてきた。

「！ そつかCOMPがあつた！」

急いでとなりの部屋へ向かおうとした矢先、硝子の割れる音。

追隨するのは鳥類と思わしき長く伸びる甲高い鳴き声。

背後で怯えすくむ女性の声が聞こえ、男は戸惑い顔で部屋の入口で立ち止まる。

眼の前には両手が翼と化し、足先は三つの爪となった女がいた。

『イタイタイタ、オイシソウナニンゲン！』

口を大きくひらき、長い舌をはいずらせる顔に男は立ちすくむ。

同時に翼が起こす風で前へと進むことも出来ず、男はなににもできない。

翼を生やした女は一度大きくはばいたあと、爪を男へ向ける。

風と恐怖で足が動かない男。

ゆっくりと、ゆっくりと近づいてくる爪を前に逃げることもできない。

なにも思つことも考えることもできず、目の前から眼をはなせない。

あと一息で爪が顔にかかる、そう思った瞬間、背後の空気が、冷えた。

『イベリヤアアアアアアアアアアアアアアアア！?!?!』

甲高い叫びとともに翼を生やした女は腹部に氷塊を食らって吹っ飛ぶ。

そのまま女は氷塊ごと窓の外へと飛んでいき、落ちていく。
なにが起こったのか分からず呆氣にとられた表情の男。

『まったくダメダメなサマナーだホーあんな奴にびびるなんて』

暢気な妖精の声が頭上から聞こえてきた。

「いま、の……お前が？」

ひねり出すようにして出た掠れた声で聞く言葉に、妖精は自慢げに応える。

『もっちらんだホー！』

「本当に、役立つとはな」

『な、助けられておいてなんていいぐさだホー！』

無理矢理苦笑して男は震える足に力をいれ、COMPをとりに行く。
キーボード横に置かれたCOMPを手を取れば、
液晶にはひとつのデータが表示されていた。

【アナライズ報告：妖鳥 ハーピー】

名称とともに細かなデータも表示されていたが、いまの男に見る余裕はない。

リビングへ戻れば、うずくまり泣いている女性とそれをなだめる妖

精。

「なんなの、なんなのアレ！ さっきからいたいなにが起きてるの！」

『サクラちゃんもうさっきのはいないホー！ だから泣かないでホー！』

「……サクラ」

テーブルにCOMPを置いた男は、優しく女性を抱きしめる。

震える女性の身体を抱く、男の手もまた震えていた。

異常な事態に怯え泣きたいのは女性だけではなかった。

そうとわかり女性は男を抱きしめ返して、むせび泣く。

悲劇は、まだ始まったばかりなのを、二人は知る由もなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5268x/>

デビル・サマナー 《異邦人伝》

2011年11月17日08時50分発行